

# 若菜集

島崎藤村

明治三〇年





こゝろなきうたのしらべは  
ひとふさのぶだうのごとし  
なさけあるてにもつまれて  
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる  
むらさきのそれにあらねど  
こゝろあるひとのなさけに  
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり  
あぢはひもいろもあさくて  
おほかたはかみてすつべき  
うたゝねのゆめのそらごと

明治二十九年の秋より三十年の春へかけてこゝろみし根無草の  
色も香もなきをとりあつめて若菜集とはいふなり、このふみの  
世にいづべき日は青葉のかげ深きころになりぬとも、そは自然  
のうへにこそあれ、吾歌はまだ萌出しまゝの若菜なるをや。

小川一眞製



深 林 の 道 遙

(百七十九頁參照)

# 目次

新 曉 ・ ・ ・ ・ ・	春 の 歌 ・ ・ ・ ・ ・	潮 音 ・ ・ ・ ・ ・	草 枕 ・ ・ ・ ・ ・	明 星 ・ ・ ・ ・ ・	お き く ・ ・ ・ ・ ・	お つ た ・ ・ ・ ・ ・	お く め ・ ・ ・ ・ ・	お さ よ ・ ・ ・ ・ ・	お き ぬ ・ ・ ・ ・ ・	お え ふ ・ ・ ・ ・ ・
53	50	49	37	34	27	22	17	10	7	1

葡 萄 の 樹 の か げ ・ ・ ・	蓮 花 舟 ・ ・ ・ ・ ・	暗 香 ・ ・ ・ ・ ・	四 つ の 袖 ・ ・ ・ ・ ・	白 壁 ・ ・ ・ ・ ・	二 つ の 聲 ・ ・ ・ ・ ・	酔 歌 ・ ・ ・ ・ ・	春 の 曲 ・ ・ ・ ・ ・	佐 保 姫 ・ ・ ・ ・ ・	春 の 歌 ・ ・ ・ ・ ・	若 水 ・ ・ ・ ・ ・
94	87	79	76	75	71	67	65	61	57	54

初戀	秋のうた	懐古	東西南北	晝の夢	夏の夜	流星	かもめ	梭 <small>をさ</small> の音 <small>ね</small>	母を葬るのうた	哀歌	天馬	高樓
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・

154 152 147 146 143 141 140 139 137 133 125 107 100

望郷	別離	強敵	月光	逃げ水	雲のゆくへ	秋風の歌	知るや君	ゑにし	傘のうち	一得一失	相思	狐のわざ
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・

185 181 178 176 172 171 166 164 164 161 159 157 156



観て 葡萄栗鼠きねづみの木彫を  
・  
・  
・  
・  
・

187

深林の逍遙 鷄き  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

202 189



# 若菜集

島崎藤村著

おえふ

處をとめ女をぞへ經へぬるおほかたの  
われは夢路ゆめぢを越えてけり  
わが世の坂さかにふりかへり  
いく山河やまかはをながむれば

水みづ靜しづかなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで  
岸の櫻の花影はなかげに

われは處女をとめとなりにつけり

都鳥みやどり浮く大川おほかわに

流れてそゞぐ川添かはぞひの

白堊しろすみれさく若草わかぐさに

夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重ここのへの

大宮内につかへして

清涼殿せいりょうでんの春の夜よの

月の光に照らされつ

雲ちりばを彫なみめ濤ほを刻ほり

霞<sup>かすみ</sup>をうかべ日をまねく  
玉の臺<sup>うてな</sup>の欄干に  
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の  
耀<sup>かがや</sup>くさまを目にも見て  
ときめきたまふさまの  
ひとりのころもの香<sup>か</sup>をかげり

きらめき初<sup>そ</sup>むる暁<sup>あかぼし</sup>星の  
あしたの空に動くごと  
あたりの光きゆるまで  
さかえの人のさまも見き

天<sup>あま</sup>つみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて  
名の夕暮に消えて行く  
秀ひいでし人の末路はても見き

春みえづかなる御園その生の  
花に隠れて人を哭なき  
秋のひかりの窓よに倚り  
夕雲ゆふぐもとほき友を戀ふ

ひとりの姉をうしなひて  
大宮内の門かどを出いで  
けふ江戸川に來て見れば  
秋はさみしきながめかな

櫻の霜葉しもは黄に落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や  
流れゆく水しづかにて  
あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世をふ経れば  
若き命いのちに絶へかねて  
岸のほとりの草をし藉き  
微笑ほほえみて泣く吾身かな





おきぬ

みそらをかける猛鷲あらいわしの  
人の處女をとめの身に落ちて  
花の姿に宿やどかれば  
風雨あらしに渴かわき雲うに饑うゑ  
天翅あまかけるべき術すべをのみ  
願ふ心のなかれとて  
黒髪くろかみ長き吾身こそ  
うまれながらの盲目めしひなれ

芙蓉ふようを前さきの身とすれば  
涙なみだは秋の花の露  
小琴をごとを前さきの身とすれば

愁<sup>うれひ</sup>は細<sup>いと</sup>き絲<sup>いと</sup>の音

いま前<sup>さき</sup>の世<sup>よ</sup>は驚<sup>おどろ</sup>の身<sup>み</sup>の  
處<sup>ところ</sup>女<sup>を</sup>にあまる羽<sup>つばさ</sup>翼<sup>さ</sup>かな

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき淺<sup>あさぢ</sup>茅<sup>ぢ</sup>生の

茂<sup>しげ</sup>れる宿<sup>やど</sup>と思<sup>おも</sup>ひなし

身<sup>み</sup>は術<sup>すべ</sup>もなき蟋<sup>こほろぎ</sup>蟀<sup>せむし</sup>の

夜<sup>よる</sup>の野<sup>の</sup>草<sup>ぐさ</sup>にはひめぐり

たゞいたづらに音<sup>ね</sup>をたてて

うたをうたふと思<sup>おも</sup>ふかな

色<sup>いろ</sup>にわが身をあたふれば

處女をとめのこゝろ鳥となり  
戀に心をあたふれば  
鳥の姿は處女をとめにて  
處女ながらも空の鳥  
猛鷲あらわしながら人の身の  
天あめと地つちとに迷ひゐる  
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮<sup>うしほ</sup>さみしき荒磯<sup>あらいそ</sup>の

巖<sup>いは</sup>陰<sup>かげ</sup>われは生れけり

あしたゆふべの白駒<sup>しろこま</sup>と

故郷<sup>ふるさと</sup>遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと  
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき  
この年までの處女<sup>をとめ</sup>とは

うれひは深く手もたゆく  
むすぼゝれたるわが思おもひ

流れて熱あつきわがなみだ  
やすむときなきわがこゝろ

亂みだれてものに狂ひよる  
心を笛ねの音に吹かん

笛をとる手は火にもえて  
うちふるひけり十とほの指

音ねにこそ渴かわけ口唇くちびるの  
笛を尋たづぬる風情ふぜいあり

はげしく深きためいきに  
笛をだけの小竹や曇るらん

髪は亂れて落つるとも  
まづ吹き入るゝ氣息いきを聴きけ

力をこめし一ふしに  
黄楊わづらのさし櫛くし落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば  
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節ふしの間まも

長き思おもひのなからずや

七こつの情聲こころを得て  
音ねをこそきかめ歌うた神がみも

われ喜よろこびを吹くときは  
鳥こずゑも梢こずゑに音ねをとゞめ

怒いかりをわれの吹くときは  
瀬せを行く魚ふちも淵ふちにあり

われ哀かなしみを吹くときは  
獅子ししも涙しをそゞらむ

われ<sup>たのしみ</sup>樂を吹くときは  
虫も鳴く音<sup>ね</sup>をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは  
流るゝ水のたち歸り

惡<sup>にくみ</sup>をわれの吹くときは  
散り行く花も止<sup>とど</sup>りて

慾<sup>よく</sup>の思<sup>おもひ</sup>を吹くときは  
心の闇<sup>やみ</sup>の響<sup>ひびき</sup>あり

うたへ浮<sup>うき</sup>世の一ふしは  
笛の夢路<sup>ゆめぢ</sup>のものぐるひ



くるしむなかれわがとも吾友よ  
えははしはね笛の音に歸れ

落つる涙をぬぐひきて  
静かにきゝね吾笛を



おくめ

こひしきまゝに家を出いで  
こゝの岸よりかの岸へ  
越えましものと來て見れば  
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親おやも捨てはてゝ  
やむよしもなき胸の火や  
鬢びんの毛を吹く河風よ  
せめてあはれと思へかし

河波かはなみ暗く瀬を早み  
流れて巖いはに碎くだくるも

君を思へば絶間なき  
戀の火炎ほのほに乾かわくべし

きのふの雨の小休をやみなく  
水嵩みかさや高くまさるとも  
よひ／＼になくわがこひの  
涙の瀧におよばじな

ゑりたまはずやわがこひは  
花鳥はなどりの繪えにあらじかし  
空鏡かゞみの印象かたち砂の文字  
梢の風の音にあらじ



えりたまはずやわがこひは  
雄々を、しき君の手に觸れて  
嗚呼あ、あ口紅くちべにをその口に  
君にうつさでやむべきや

戀は吾身の社やしろにて  
君は社の神なれば  
君の祭壇つくへの上ならで  
なにゝいのちを捧ささげまし

碎くだかば碎け河波かはなみよ  
われに命はあるものを  
河波高く泳ぎ行き  
ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も  
吾身はすべて火ほのほ炎なり  
思ひ亂れて嗚呼戀の  
千筋ちすぢの髪かみの波なみに流るゝ

おつた

花灰ほの見ゆる春の夜の

すがたに似たる吾命わがいのち

朧おぼろ々に父母ちちははは

二つの影と消えうせて

世に孤兒みなしごの吾身こそ

影より出でし影なれや

たすけもあらぬ今は身は

若き聖ひじりに救はれて

人なつかしき前髪まへがみの

處女をとめとこそはなりにけれ

若き聖ひじりののたまはく



時をし待たむ君ならば  
かの柿の實をとるなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
ことしの秋もはや深し  
まづその秋を見よやとて  
聖に柿をすゝむれば  
その口唇くちびるにふれたまひ  
かくも色よき柿ならば  
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のたまはく  
人の命の惜をしからば  
嗚呼あかの酒を飲あむなかれ  
かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり  
まづその春を見よやとて  
聖に酒をすゝむれば  
夢の心地に酔ひたまひ  
かくも樂しき酒ならば  
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のゝたまはく  
道行き急ぐ君ならば  
迷ひの歌をきくなかれ  
かくいひたまふうれしさに  
歌も心の姿なり  
まづその聲をきけやとて  
一ふしうたひいでければ

聖は魂たまも酔よひたまひ  
かくも樂しき歌ならば  
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のゝたまはく  
まことをさぐる吾身なり

道の迷まよひとなるなかれ

かくいひたまふうれしさに

情なさけも道みちの一つなり

かゝる思おもひを見よやとて

わがこの胸に指さげせば

聖は早く戀こひひわたり

かくも樂しき戀ならば

などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ  
そゞろあるきのこゝろなく  
ふと目に入るを手にとれば  
雪より白き小石なり  
若き聖のゝたまはく  
智恵の石とやこれぞこの  
あまりに惜しき色なれば  
人に隠して今も放はなたじ

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごゝろを

たれかゑる

をとこのかたる

ことのはを

まことゝおもふ

ことなかれ

をとめごゝろの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

鬢びんの毛を

黄楊つげの小櫛をぐしに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なんと

よみいでし

あつきなさけは

たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くにゝには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

戀か名か

忠兵衛も名の

ために果<sup>は</sup>つ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

ゑるや君

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ



お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容さよひめ姫は

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはふれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

## 明星

浮べる雲と身をなして  
あしたの空そらに出でざれば  
などしるらめや明星の  
光の色のくれなるを

朝あさの潮うしほと身をなして  
流れて海に出でざれば  
などゑるらめや明星の  
清すみて哀かなしききらめきを

なにかこひしきあかぼし暁星の

空<sup>むな</sup>しき天<sup>あま</sup>の戸を出でて  
深くも遠きほとりより  
人の世<sup>よ</sup>近く來<sup>きた</sup>るとは

潮<sup>うしほ</sup>の朝<sup>あさ</sup>のあさみどり  
水<sup>み</sup>底<sup>そこ</sup>深き白石を  
星の光に透<sup>す</sup>かし見て  
朝<sup>あさ</sup>の齡<sup>よはひ</sup>を數ふべし

野の鳥ぞ啼<sup>な</sup>く山河<sup>やまかは</sup>も  
ゆふべの夢をさめいでて  
細く棚<sup>たなび</sup>引くゑのゝめの  
姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のゑらべあり  
朝には朝の音もあれど  
星の光の絲の緒に  
あしたの琴は静なり

まだうら若き朝の空  
きらめきわたる星のうち  
いと／＼若き光をば  
名けましかば明星と

草枕

夕波くらく啼く千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽はねをうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋ひとすぢに

なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて

とけて涙となりにけり

蘆葉あしはを洗ふ白波の

流れて巖いはを出づること

思ひあまりて草枕

まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋ねたつ侘わび

道なき森に分け入りて

などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや

野末のずゑに山に谷たに蔭かげに

見るよしもなき朝夕の

光もなくて秋暮れぬ



想も薄く身も暗く  
残れる秋の花を見て  
行くへもしらず流れ行く  
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば  
ゆふべの雲の雨となり  
身を夕雨にたとふれば  
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして  
風に吹かれて飄り  
朝の黄雲にともなはれ  
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか  
われは道なき野を慕ひ  
思ひ亂れてみちのくの  
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ  
亂れて熱き吾身には  
日影も薄く草枯れて  
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は  
吹く北風を琴と聴き  
悲しみ深き吾目には

色彩いろなき石も花と見き

あゝ孤獨ひとりみの悲痛かなしきを

味あじひ知れる人ならで

誰たれにかたらん冬の日の

かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば

空冬雲おほに覆おほはれて

身たまにふりかゝる玉たま霰あられ

袖そでの氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風つよ勁よく

小川の水の薄氷

氷のしたに音するは  
流れて海に行く水か

啼ないて羽風はかせもたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光ひかりもうすき寒空さむぞらの

汝なれも荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の

光もなくて暮れ行けば

人めも草も枯れはてゝ

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱  
なにを酔ひ泣く忍び音ねに  
聲もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾ひきて

野末をかよふ人の子よ

聲調しらべひく手も凍りはて

なに門かどづけの身の果はてぞ

やさしや年もうら若く

まだ初戀のまじりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて  
霜と霜との枯草の  
道なき道をふみわけて  
きたれば寒し冬の海

朝は海邊うみべの石の上へに  
こしうちかけてふるさとの  
都のかたを望めども  
おとなふものは濤なみばかり

暮はさみしき荒磯あらいその  
潮うしほを染めし砂に伏し  
日の入るかたをながむれど  
湧わきくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の  
岩に碎<sup>くだ</sup>けて散れるとき  
かなしいかなや冬の日の  
潮<sup>うしほ</sup>とともに歸るとき

誰<sup>たれ</sup>か波路を望み見て  
そのふるさとを慕はざる  
誰か潮の行くを見て  
この人の世<sup>をし</sup>を惜まざる

曆<sup>こよみ</sup>もあらぬ荒磯の  
砂路にひとりさまよへば  
みぞれまじりの雨雲の

落ちて汐うしほとなりけり

遠く湧きくる海の音

慣れてさみしき吾耳に

怪しやもるゝものねの音は

まだうらわかき野路の鳥

鳴あ呼あめづらしのしらべぞと

聲のゆくへをたづぬれば

緑の羽はねもまだ弱はき

それも初はつ音ねか鶯うぐひすの

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども



若菜の萌えて色青き  
こゝちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春  
うれしや風に送られて  
きたるらしとや思へばか  
梅が香ぞする海の邊に

磯邊に高き大巖の  
うへにのぼりてながむれば  
春やきぬらん東雲の  
潮の音遠き朝ぼらけ



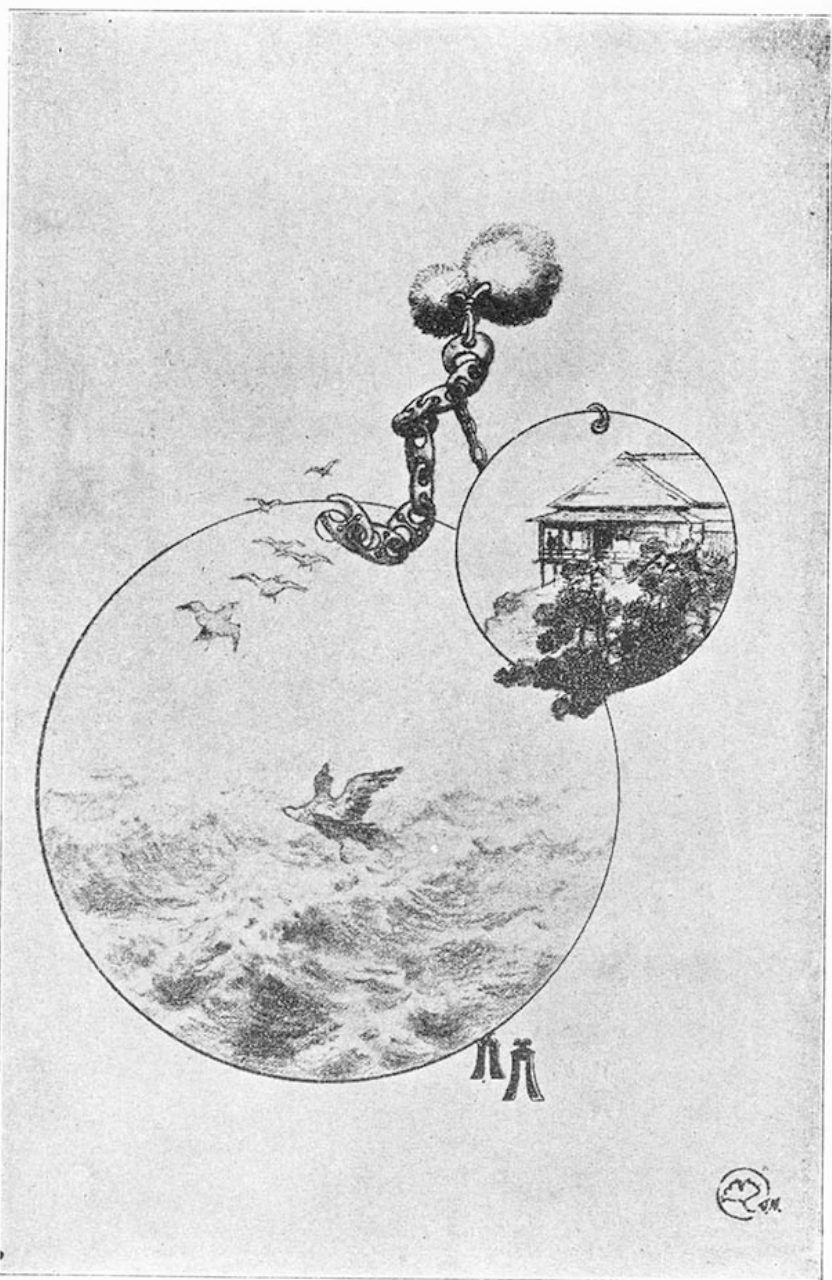
潮音

わきてながるゝ  
やほじほの  
そこにいざよふ  
うみの琴  
ゑらべもふかし  
もゝかはの  
よろづのなみを  
よびあつめ  
ときみちくれば

うらゝかに  
とほくきこゆる  
はるのしほのね

## 春の歌

たれかおもはん鶯の  
涙もこほる冬の日  
若き命は春の夜の  
花にうつろふ夢の間まと  
あゝよしさらば美酒うまざけに  
うたひあかさん春の夜を



梅のにほひにめぐりあふ  
春を思へばひとゑれず  
からくれなゐのかほばせに  
流れてあつきなみだかな  
あゝよしさらば花影に  
うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて  
おもひわづらふころだに  
春のすがたをとめくれば  
たもとにゝほふ梅の花  
あゝよしさらば琴の音に  
うたひあかさん春の夜を

新 曉

紅くれなひ細くたなびける

雲とならばやあけぼのゝ

雲とならばや

やみを出でゝは光ある

空とならばやあけぼのゝ

空とならばや

春の光を彩れる

水とならばやあけぼのゝ

水とならばや

鳩に履まれてやわらかき  
草とならばやあけぼのゝ

草とならばや

## 若水

くめどつきせぬ

わかみづを

きみとくまゝし

かのいづみ

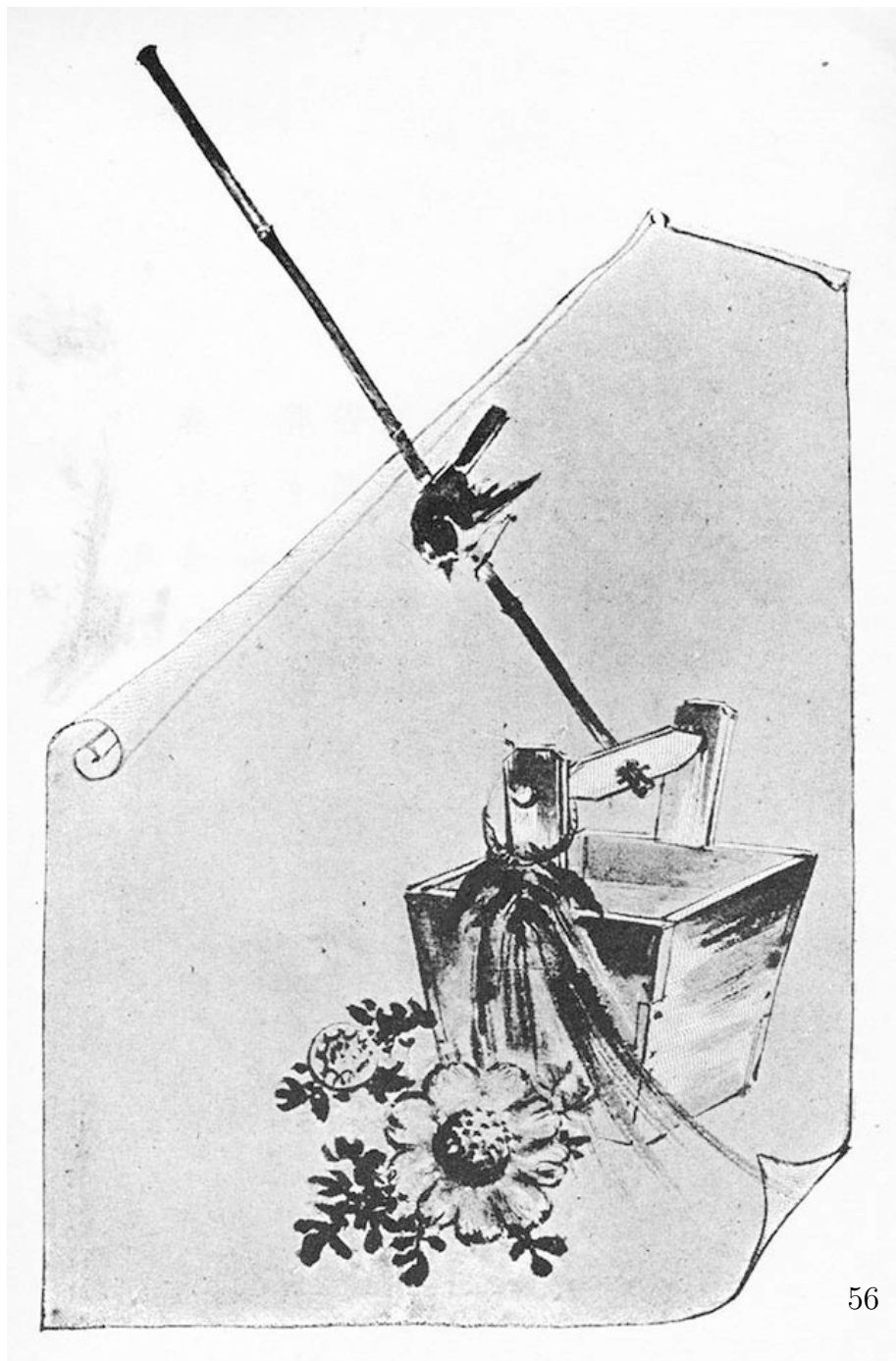
かはきもゑらぬ



わかみづを  
きみとのまゝし  
かのいづみ

かのわかみづと  
みをなして  
はるのこゝろに  
わきいでん

かのわかみづと  
みをなして  
きみとながれん  
花のかげ



## 春の歌

春はきぬ

春はきぬ

初音<sup>はつね</sup>やさしきうぐひすよ  
こぞに別離<sup>わかれ</sup>を告げよかし  
谷間に残る白雪よ  
葬りかくせ去<sup>こ</sup>歳<sup>ぞ</sup>の冬

春はきぬ

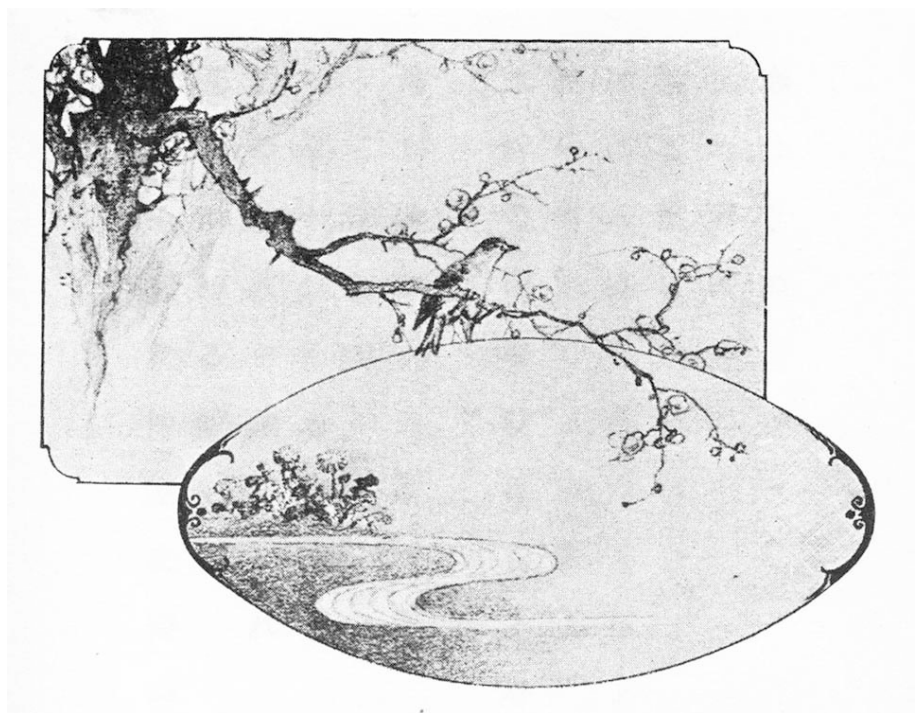
春はきぬ

さみしくさむくことばなく  
まづしくくらくひかりなく  
みにくくおもくちからなく  
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草よ  
とほき野面を畫けかし  
さきては紅き春花よ  
樹々の梢を染めよかし



春はきぬ

春はきぬ

霞<sup>かすみ</sup>よ雲<sup>くも</sup>よ動<sup>ゆる</sup>ぎいで

冰れる空をあたくめよ

花の香<sup>か</sup>おくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春をよせくる朝<sup>あさ</sup>汐<sup>しほ</sup>よ

蘆<sup>あし</sup>の枯<sup>かれ</sup>葉<sup>は</sup>を洗ひ去れ

霞に酔へる雛<sup>ひな</sup>鶴<sup>づる</sup>よ

若きあしたの空に飛べ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹せりの根を絶えて  
冰れるなみだ今いづこ  
つもれる雪の消えうせて  
けふの若菜と萌もえよかし

佐保姫

ねむれる春ようらわかき  
かたちをかくすことなかれ

たれこめてのみけふの日を  
なべてのひとのすぐすうち  
さめての春のすがたこそ  
まだ夢のまの風情なれ

ねむげの春よさめよ春

さかしきひとのみざるまに

若紫の朝霞

かすみの袖そでをみにまとへ

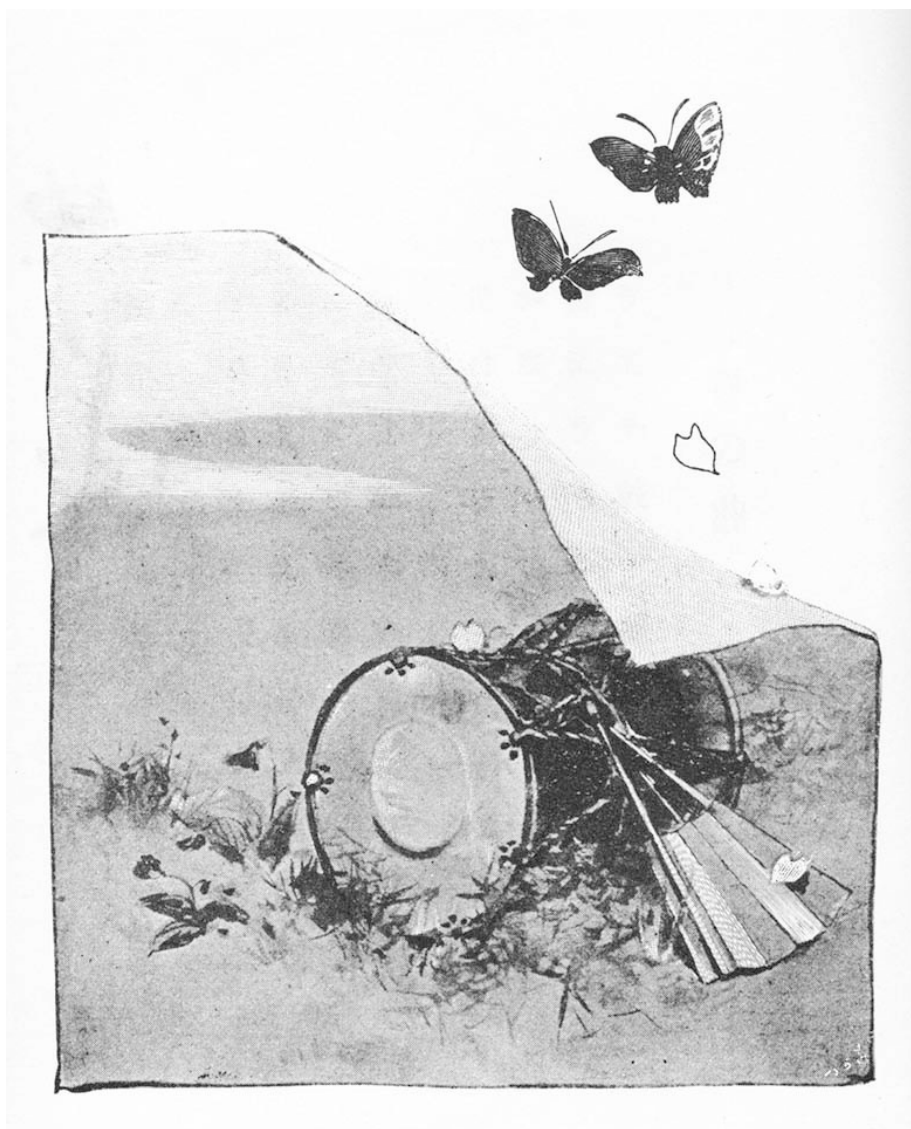
はつねうれしきうぐひすの

鳥のゑらべをうたへかし



ねむげの春よさめよ春  
ふゆのこほりにむすぼれし  
ふるきゆめぢをさめいでゝ  
やなぎのいとのみだれがみ  
うめのはなぐしさしそへて  
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春  
あゆめばたにの早さわらびの  
ゑたもえいそぐ汝ながあしを  
たかくもあげよあゆめ春  
たえなるはるのいきを吹き  
こぞめの梅の香にゝほへ



## 春の曲

うてやつづみ鼓の春の音

雪にうもるゝ冬の日の

かなしき夢はとざされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこそめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とをぬふ絲は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかゞふことなかれ  
はなさきにほふ蔭をこそ  
春の臺うてなといふべけれ

小蝶こちようよ花にたはふれて  
優しき夢をみては舞ひ  
酔ふて羽袖はそでもひら／＼と  
はるの姿をまひねかし

緑のはねのうくひすよ  
梅の花笠ぬひそへて  
ゆめ静なるはるの日の  
えらべを高く歌へかし

## 酔歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば

酔ふて袂たもとの歌草うたぐさを

醒さめての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間まに

樂しき春は老いやすし

誰たが身たにもてる寶たからぞや

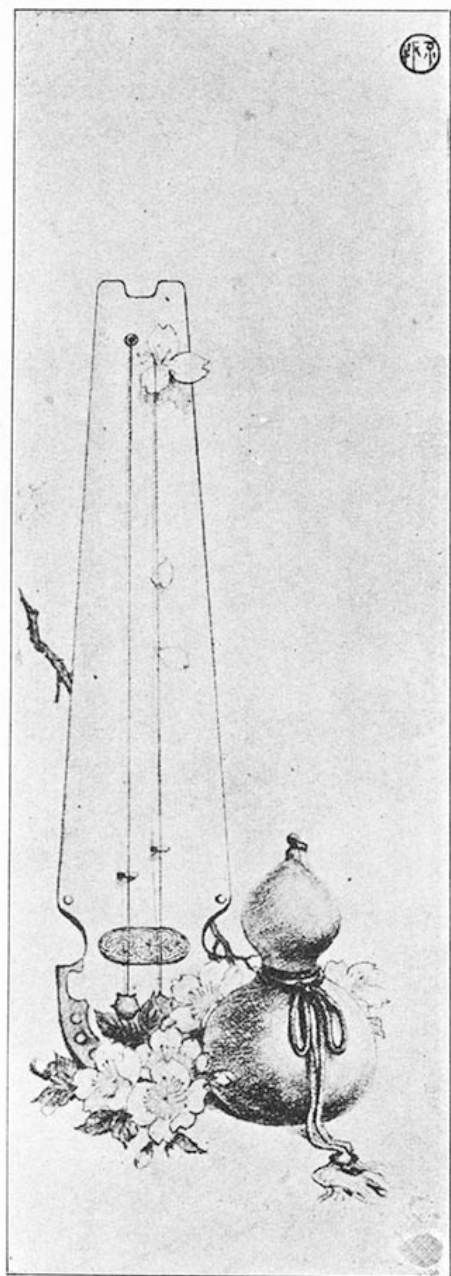
君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉には憂愁あり  
堅く結べるその口に  
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を説くなかれ  
名もなき旅を行くなかれ  
甲斐なきことをなげくより  
來りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の  
獨りさみしきものぐるひ  
悲しき味の世の智慧に  
老いにけらしな旅人よ



心の春の燭火ともしびに

若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば

哀かなしからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く

君の行衛ゆくへはいづこぞや

琴花酒ことばなさけのあるものを

とゞまりたまへ旅人よ



二つの聲

朝

たれか聞くらん朝の聲  
眠<sup>ねむり</sup>と夢を破<sup>やぶ</sup>りいで  
彩<sup>あや</sup>なす雲にうちのりて  
よろづの鳥に歌はれつ  
天のかなたにあらはれて  
東の空に光あり  
そこに時<sup>とき</sup>あり始<sup>はじめ</sup>あり  
そこに道あり力あり  
そこに色<sup>いろ</sup>あり詞<sup>ことば</sup>あり



そこに聲あり命あり  
みそらにさがり地にかけり  
のこんの星ともろともに  
光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮の聲  
霞の翼雲の帯  
煙の衣露の袖  
つかれてなやむあらそひを  
闇のかなたに投げ入れて  
夜の使の蝙蝠の

飛ぶ間も聲のをやみなく  
こゝに影あり迷<sup>まよひ</sup>あり  
こゝに夢あり眠<sup>ねむり</sup>あり  
こゝに闇あり休息<sup>やすみ</sup>あり  
こゝに永<sup>なが</sup>きあり遠きあり  
こゝに死ありとうたひつゝ  
草木にいこひ野にあゆみ  
かなたに落つる日とゝもに  
色なき闇に暮ぞ隠るゝ

白しら壁かべ

たれかゑるらん花ちかき  
高たか樓どのわれはのぼりゆき  
みだれて熱きくるしみを  
うつしいでけり白壁に  
唾つばにゑるせし文字なれば  
ひとゑれずこそ乾きけれ  
あゝあゝ白き白壁に  
わがうれひありなみだあり

四つの袖そで

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの

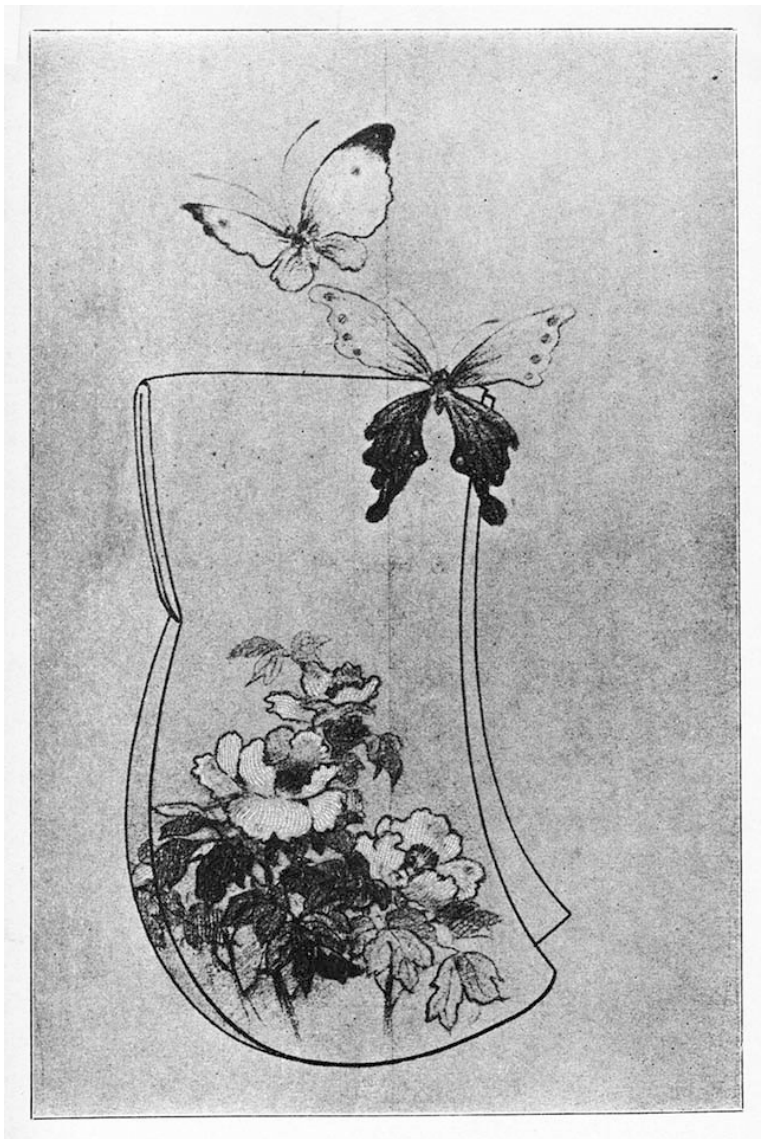
霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌ひらの

お夏の手にも觸るゝとき

をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき



をとこの黒き目のいろの  
お夏の胸に映るとき  
をとこの紅<sup>あか</sup>き口唇<sup>くちびる</sup>の  
お夏の口にもゆるるとき

人こそゑらね鳴<sup>あ</sup>呼<sup>ゝ</sup>戀の  
ふたりの身より流れいで  
げにこがるれど慕へども  
やむときもなき清十郎



暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを

まろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの

をしければ

やみにもはるの

香かに酔はん

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

妹

そらも急へりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのゑろく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるき

はるのよの

やみをおそるゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香<sup>か</sup>なりせば

いづれかよるに

にほはまし

姉

こぞのこよひは

わがどもの

うすこうばいの

そめごろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがどもの

なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

木き下ね川がには

うれひゑづみし

よなりけり

姉

こぞのこよひは

わがもの

おもひはるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがもの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごころ

ふるればいとゞ

やはらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

ゑりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし



はるのよを

## 蓮花舟

ゑはくもこほるゝつゆははちすはの

うきはにのみもたまりけるかな

## 姉

あゝはすのはな

はすのはな

かげはみえけり

いけみづに

ひとつのふねに

さをさして



うきはをわけて

こぎいでん

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもゑろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづゑづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

はにすれてゆく

みなれぎを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

荷葉はすはにうたひ姉

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみゑづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなと

いづれうるはし

いづれやさしき

葡萄<sup>ぶどう</sup>の樹<sup>き</sup>のかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ

ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに

あきはいりひの

てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき



姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはゑづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

姉

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにまかじ

ひとふさの



われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをゑれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかげのたまに

てはふれて

わがさしぐしの

おちにけるかな

高<sup>たか</sup>  
樓<sup>どの</sup>

わかれゆくひとをおしむとこよひより

とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに

たえかねて

このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ

わがあねよ

たびのころもを

とゝのへよ

姉

わかれといへば

むかしより

このひとのよの

つねなるを

ながるゝみづを

ながむれば

ゆめはづかしき

なみだかな

妹

ゑたへるひとの

もとにゆく

きみのうへこそ

たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば

なにをひかりの

わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ



ぬにつけわれを

おもへかし

けふわかれては

いつかまた

あひみるまでの

いのちかも

妹

きみがさやけき

めのいろも

きみくれなるの

くちびるも

きみがみどりの

くろかみも

またいつかみん

このわかれ

姉

なれがやさしき

なぐさめも

なれがたのしき

うたごゑも

なれがこゝろの

ことのねも

またいつきかん

このわかれ

妹

きみのゆくべき

やまかはゝ

おつるなみだに

みえわかず

そでのまぐれの

ふゆのひに

きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはん

天馬

序

老<sup>おい</sup>は若<sup>わか</sup>は越<sup>こ</sup>しかたに  
文<sup>ふみ</sup>に照<sup>あ</sup>らせどま<sup>ら</sup>れらなる  
奇<sup>く</sup>しきためしは箱根山  
弥<sup>やよ</sup>生の末<sup>ひ</sup>のゆふまぐれ  
南<sup>あま</sup>の天<sup>と</sup>の戸<sup>と</sup>をいでて  
よな／＼北<sup>あま</sup>の宿<sup>と</sup>に行く  
血<sup>く</sup>の深<sup>な</sup>紅<sup>あ</sup>の星<sup>あ</sup>の影  
かたくな／＼りし男<sup>あ</sup>さへ  
星<sup>あ</sup>の光<sup>あ</sup>を眼<sup>あ</sup>に見<sup>あ</sup>ては  
身<sup>ま</sup>にふりかゝる凶<sup>ま</sup>禍<sup>ご</sup>の

天の兆しるしとうたがへり

總そう鳴なきに鳴うぐひすく鶯すの

にほひいでたる聲をあげ

さへづり狂ふ音ねをきけば

げにめづらしき春の歌

春を得知らぬ處をとめ女さへ

かのうぐひすのひとこゑに

枕の紙のしめりきて

人なつかしきおもひあり

まだ時ならぬ白百合の

籬まがきの陰にさける見て

九つくも十九おきなの翁うつし世の

こゝろの慾の夢を戀ひ

音ねをだにきかぬ雛ひな鶴づるの

軒のきの榎えのき樹きに來て鳴けば  
寢ね覺ざめの老お嫗うな後の世の  
花の臺うてなに泣きまどふ  
空にかゝれる星のいろ  
春さきかへる夏なつ花はなや  
是これわざはひにあらずして  
よしや兆しるしといへるあり  
なにを酔ひ鳴く春はる鳥どりよ  
なにを告げくる鶴の聲  
それ鳥の音ねにうらな卜ひて  
よろこびありと祝ふあり  
高き聖ひじりのこの村に  
聲をあげさせたまふらん  
世を傾けむ麗よき人ひとの

茂れる賤しづの春草はるぐさに  
いでたまふかとのゝしれど  
誰かゑるらん新星にひぼしの  
まことの北をさしゝめし  
さみしき蘆あしの湖みづうみの  
沈める水に映うつるとき  
名もなき賤の片びさし  
春の夜風の音を絶え  
村の南のかたほとり  
その夜生れし牝めの馬は  
流るゝ水の藍染あみぞめの  
青毛あをげやさしき姿なり  
北に生れし雄をの馬の  
栗毛にまじる紫は



色あけぼのの春霞

光をまとふ風情あり

星のひかりもをさまりて

噂に残る鶴の音や

啼く鶯に花ちれば

嗚呼この村に生れてし

馬のありとや問ふ人もなし

雄馬

あな天雲にともなはれ

緑の髪をうちふるひ

雄馬は人に随ひて

箱根の嶺を下りけり

胸は踊りて八百潮の  
かの蒼溟に湧くごとく  
喉はよせくる春濤を  
飲めども渴く風情あり  
目はひさかたの朝の星  
睫毛は草の淺緑  
うるほひ光る眼瞳には  
千里の外もほがらにて  
東に照らし西に入る  
天つみそらを渡る日の  
朝日夕日の行衛さへ  
雲の絶間に極むらん  
二つの耳をたとふれば  
いと幽なる朝風に

そよげる草の葉のごとく  
蹄ひづめの音をたとふれば  
紫金しこんの色のやきがねを  
高くも叩たたく響たあり  
狂へば長たき鬣たの  
うちふりうちふる亂れ髪  
燃えてはめぐる血の汐しほの  
流をれて踊をる春の海  
噴はく紅くれなの光には  
火炎ほのほの氣息いきもあらだちて  
深くも遠いき嘶なき聲は  
大神おほがみの住うむ梁つばりの  
塵ちりを動かす力あり  
あゝ朝鳥あさどりの音をきゝて

富士の高根の雪に鳴き  
夕つげわたる鳥の音に  
木曾の御嶽の巖を越え  
かの青雲に嘶きて  
天より天の電影の  
光の末に隠るべき  
雄馬の身にてありながら  
なさけもあつくなつかしき  
主人のあとをとめくれば  
箱根も遠し三井寺や  
日も暖に花深く  
さゝなみ青き湖の  
岸の此彼草を行く  
天の雄馬のすがたをば

誰かは思ひ誰か知る  
しらずや人の天雲あまぐもに  
歩むためしはあるものを  
天馬てんばの下りて大土おほつちに  
歩むためしのなからめや  
見よ藤の葉の影深く  
岸の若草香かにいでて  
春花はるはなに酔ちよふ蝶ちょうの夢  
そのかげを履ふむ雄馬には  
一つの紅あかき春花はるはなに  
見えざる神かみの宿やどりあり  
一つうつろふ野の色に  
つきせぬ天のうれひあり  
嗚呼あは鷲鷹たかの飛ぶ道に

高く懸れる大空の  
無限の弦に觸れて鳴り  
男神女神に戯れて  
照る日の影の雲に鳴き  
空に流るゝ満潮を  
飲みつくすとも渴くべき  
天馬よ汝が身を持ちて  
鳥のきて啼く鳩の海  
花橘の蔭を履む  
その姿こそ雄々しけれ

牝馬

青波あをなみ深きみづうみの

岸のほとりに生れてし

天の牝馬めうまは東あづまなる

かの陸奥みちのくの野に住めり

霜うるほに露ほひ風に擦すれ

音おともわびしき枯くさの

すゝき尾花にまねかれて

荒野あれのに嘆く牝馬かな

誰つばめか燕の聲を聞き

たのしきうたを耳にして

日も暖かに花深き

西の空をば慕はざる

誰か秋鳴くかりがねの

かなしき歌に耳たてゝ

ふるさとさむき遠<sup>とほぞら</sup>天の  
雲の行衛<sup>ゆくへ</sup>を慕はざる  
白き羚羊<sup>ひつじ</sup>に見まほしく  
透<sup>す</sup>きては深く柔軟<sup>やはらか</sup>き  
眼<sup>まなこ</sup>の色<sup>いろ</sup>のうるほひは  
吾<sup>わ</sup>が古里<sup>ふるさと</sup>を忍<sup>しの</sup>べばか  
蹄<sup>ひづめ</sup>も薄<sup>うす</sup>く肩<sup>かた</sup>瘦<sup>や</sup>せて  
四<sup>よ</sup>つの脚<sup>あし</sup>さへ細<sup>こ</sup>りゆき  
そ<sup>そ</sup>の鬣<sup>たてがみ</sup>の艶<sup>つや</sup>なきは  
荒<sup>あれの</sup>野<sup>の</sup>の空<sup>の</sup>に嘆<sup>なげ</sup>げばか  
春<sup>は</sup>は名<sup>な</sup>取<sup>とり</sup>の若<sup>わ</sup>草<sup>くさ</sup>や  
病<sup>やま</sup>める力<sup>ちから</sup>に石<sup>いし</sup>を引<sup>ひ</sup>き  
夏<sup>は</sup>は國<sup>こく</sup>分<sup>ぶ</sup>の嶺<sup>みね</sup>を越<sup>こ</sup>え





牝馬にあまる鹽を負ふ

秋は廣瀬の川添かはぞひの

紅葉もみぢの蔭にむちうたれ

冬は野末に日も暮れて

みぞれの道の泥に饑うゆ

鶴よみそらの雲に飽き

朝の霞の香に酔ひて

春の光の空を飛ぶ

羽翼つばさの色の嫉ねたきかな

獅子ししよさみしき野に隠れ

道なき森に驚きて

あけぼの露にふみ迷ふ

鋭き爪のこひしやな

鹿よ秋山あきやま妻戀つまこひに

黄葉もみぢのかげを踏あへみ分けて  
谷間の水あへに喘あへぎよる  
眼ひとみ睛の色のやさしやな  
人をつめたくあぢきなく  
思ひとりしは幾いくとせ歳か  
命を薄くあさましく  
思そひ初そめしは身を責そむる  
強くびきき軛くびきに嘆なげき侘わび  
花に涙をそゞぐより  
悲しいかなや春の野に  
湧わける泉を飲のみ干かわすも  
天の牝馬めづのかぎりなき  
渴ける口をなにかせむ  
悲しいかなや行く水の

岸の柳の樹の蔭の

かの新草にひぐさの多くとも

饑うゑたる喉のどをいかにせむ

身は塵埃ちりひぢの八重葎やへむぐら

えげれる宿にうまるれど

かなしや地つちの青草は

その慰藉なぐさめにあらじかし

あゝ天雲あまぐもや天雲や

塵ちりの是世このよにこれやこの

轡くつわも折れよ世も捨てよ

狂ひもいでよ軛くびきさへ

噛み碎けとぞ祈るなる

牝馬あはれのこゝろ哀なり

盡きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや  
渴かぬ水の湧くといふ  
天の泉のなつかしや  
せまき厩うまやを捨てはてて  
空を行くべき馬の身の  
心ばかりははやれども  
病みては零おつる泪なみだのみ  
草に生れて草に泣く  
姿やさしき天の馬  
うき世のものにことならで  
消ゆる命のもろきかな  
散りてはかなき柳葉やなぎはの  
そのすがたにも似たりけり  
波に消え行く淡雪あはゆきの

そのすがたにも似たりけり  
げに世の常の馬ならば  
かくばかりなる悲嘆かなしみに  
身の苦悶わづらひを恨み侘び  
聲ふりあげて嘶いななかん  
亂れて長き鬣たてがみの  
この世かの世の別れにも  
心ばかりは静和しづかなる  
深く悲しき聲きけば  
あゝ幽遠かすかなる氣息ためいきに  
天のうれひを紫の  
野末の花に吹き残す  
世の名残こそはかなけれ

## 哀歌

### 中野逍遙をいたむ

秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊譜壚前柳、  
風流銷盡二千年、これ中野逍遙が秋怨しゅうえんじゅうぜつ十絶の一なり。

逍遙字は威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。

文科大學の異材なりしが年僅わづかに二十七にしてうせぬ。

逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の餘睡にあらざるはなし。

左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、寄語殘月休長嘆、我輩亦是艷生涯、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君十首

中野逍遙

思君我心傷

思君我容瘁

中夜坐松蔭

露華多似淚

思君我心悄

思君我腸裂

昨夜涕淚流

今朝盡成血

示君錦字詩

寄君鴻文冊

忽覺筆端香

窗外梅花白

爲君調綺羅

爲君築金屋

中有鴛鴦圖

長春夢百祿



贈君名香篋

應記韓壽恩

休將秋扇掩

明月照眉痕

贈君双臂環

寶玉價千金

一鐫不乖約

一題勿變心

訪君過臺下

清宵琴響搖

佇門不敢入

恐亂月前調

千里嘯金鶯

春風吹綠野

忽發頭屋桃

似君三兩朶

嬌影三分月

芳花一朶梅

渾把花月秀

作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く  
水になき名をゑるすとて  
今はた残る歌反古の  
ながき愁ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨の  
いろに染めてし花の木  
君がゑらべの歌の音に  
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前の世は  
みそらにかゝる星の身の  
人の命のあさぼらけ

光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に  
生れいでたる身を持ちて  
友の契ちぎりも結むすばずに  
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼まなこつゆを帯び  
葡萄ぶどうのたまとまがふまで  
その面影をつたへては  
あまりに妬ねたき姿かな

同じ時とき世よに生れきて  
同じいのちのあさぼらけ

君からくれなゐの花は散り  
われ命あり八重やへむぐら葎

かなしいかなやうるはしく  
さきそめにける花を見よ  
いかなればかくとゞまらで  
待たで散るらんさける間まも

かなしいかなやうるはしき  
なさけもこひの花を見よ  
いとノヽ清きそのこひは  
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花  
君しこひとにあらねども  
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に  
あまりに惜しき才さへなれば  
病やまひに塵ちりに悲かなしみに  
死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの  
ことばの海のみなれ棹ざを  
磯いそにくだくる高潮たかしほの  
うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の  
きづなも捨てて嘶いなけば  
つきせぬ草に秋は來て  
聲も悲しき天の馬

かなしいかなや音ねを遠み  
流るゝ水の岸にさく  
ひとつの花に照らされて  
飄ひるがへり行く一葉舟ひとはふね

## 母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるゑぐれかな

きみがはかばに

きゞくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

ゑげくして

おもからずやは

そのゑるし

いつかねむりを

さめいでて

いつかへりこん

わがはゝよ

紅あから羅ひく子も

ますらをも

みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ

ことなかれ

あゝかへりくる



ことなかれ

はるはをなさき

はなちりて

きみがはかばに

かゝるとも

なつはみだるゝ

ほたるびの

きみがはかばに

とべるとも

あきはさみしき

あきさめの

きみがはかばに

そゝぐとも

ふゆはましるに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

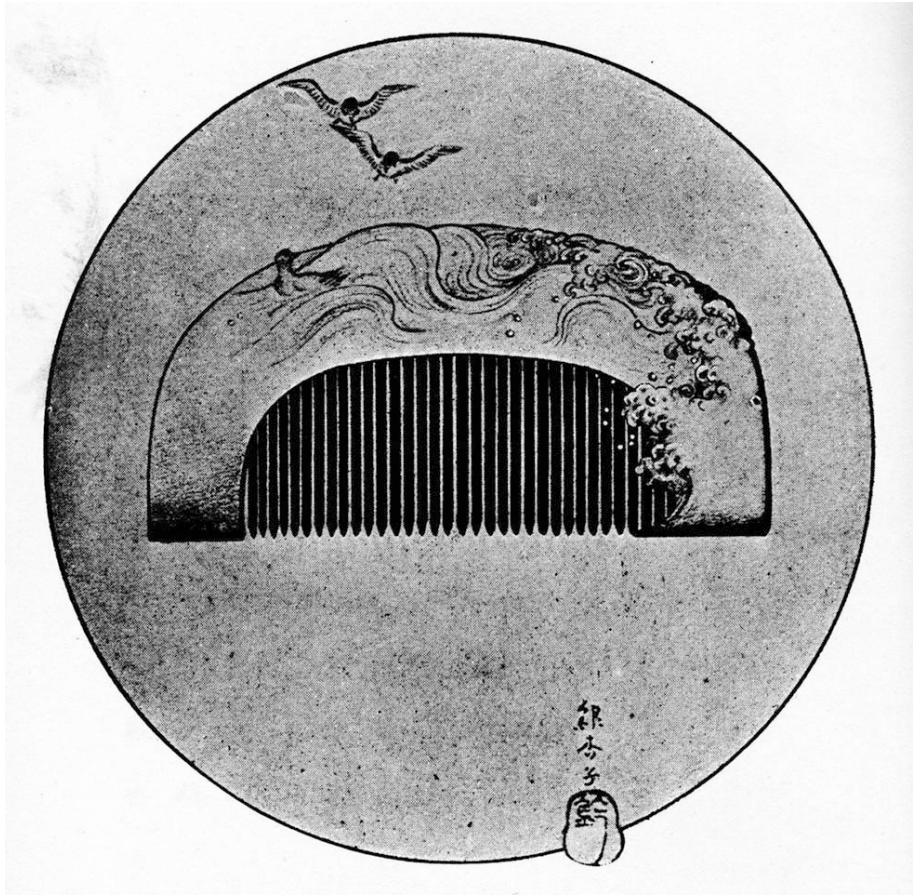
ゆめまくら

おそるゝなかれ

わがはゝよ

梭をさの音ね

梭の音を聞くべき人は今いづこ  
心を絲により初そめて  
涙なみだににじむ木綿もめん縞  
やぶれし窓まどに身をなげて  
暮れ行く空をながむれば  
ねぐらに急むらぐ村がらす鴉  
連つれにはなれて飛ぶ一羽  
あとを慕ふてかあ／＼と



かもめ

波に生れて波に死ぬ

情なさけの海のかもめどり

戀おほなみの激浪たちさわぎ

夢むすぶべきひまもなし

闇くらき潮うしほの驚きて

流れて歸るわだつみの

鳥ゆくへの行衛ゆくへも見えわかぬ

波にうきねのかもめどり

## 流星

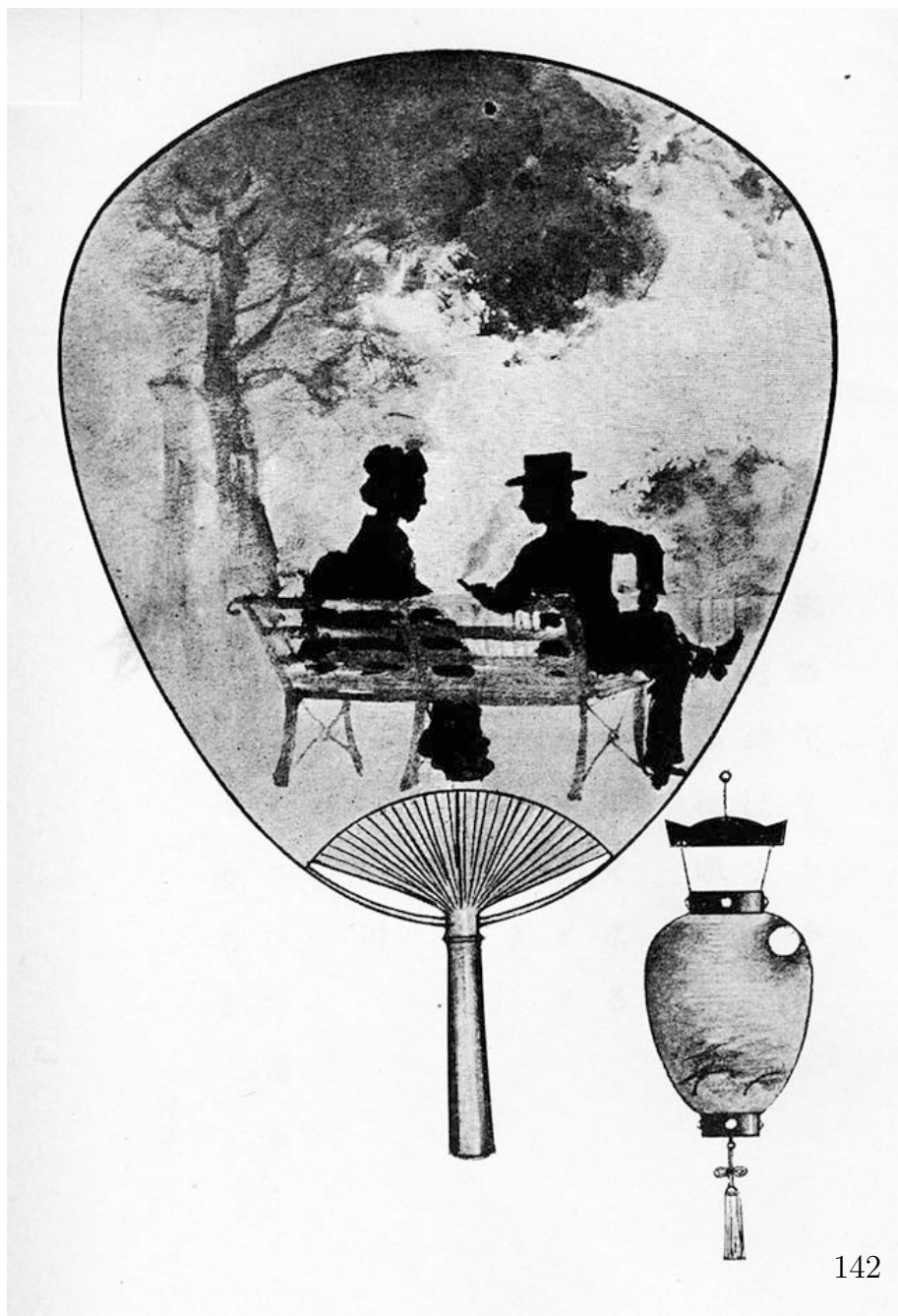
門<sup>かど</sup>にたち出<sup>い</sup>でたゞひとり  
人待ち顔のさみしさに  
ゆふべの空をながむれば  
雲の宿りも捨てはてて  
何かこひしき人の世に  
流れて落つる星一つ

## 夏の夜

君と遊ばん夏の夜の  
青葉の影の下すゞみ  
短かき夢は結ばずも  
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる  
晝の愁うれひはたえずとも  
星の光をかぞへ見よ  
樂たのみしのかず夜よは盡しきじ

夢かうつゝか天あまの川がは





星に假寢の織姫の

ひゞきもすみてこひわたる  
梭をさの遠音とほねを聞かめやも

## 晝の夢

花はな橘たちばなの袖そでの香かの

みめうるはしきをとめごは

眞晝まひるに夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

白日まひるの夢のなぞもかく

忘れがたくはありけるものか



ゆめと知りせばなまなかに  
さめざらましを世に出いでて  
うらわかぐさのうらわかみ  
何をか夢の名残ぞと  
問はゞ答へん目さめては  
熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば  
つよくもくさをふくかぜか  
もとよりかぜのみにしあれば  
きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば  
かぜにふかるゝくさなれや  
もとよりくさのみにしあれば  
きのふは南けふは北

## 懐古

天あまの河原かはらにやほよろづ  
ちよろづ神のかんつどひ  
つどひいませしあめつちの  
始はじめのときを誰たれか知る

それ大神おほがみの天雲あまぐもの

八重かきわけて行くごとく

野の鳥ぞ啼なく東路あづまぢの

碓氷うすひの山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき

吾妻はやとこひなきて  
熱き涙をそゝぎてし  
尊の夢は跡も無し

大和の國の高市の  
雷山に御幸して

天雲のへにいほりせる  
御輦のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や  
志賀の都は荒れにしと  
むかしを思ふ歌人の  
澄める怨をなにかせん

春は霞かすめる高臺たかどのに

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重ここのへの

大宮内のともしびや

さむさは雪に凍る夜の

龍たつのころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ

人の血汐ちしほの流るとも

今はむなしきわだつみの





まん／＼としてきはみなし

むかしはひろき關が原

つるぎに夢を争へど

今は寂さびしき草のみぞ

ばう／＼としてはてもなき

われ今いま秋の野にいでて

奥山おくやま高くのぼり行き

都のかたを眺むれば

あゝあゝ熱きなみだかな

秋のうた

秋は來ぬき

秋は來ぬ

一葉ひとばは花は露ありて

風のきて弾ひく琴の音ねに

青き葡萄ぶどうは紫の

自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ

秋は來ぬ

おくれさきだつ秋草あきぐさも

みな夕霜ゆふしものおきどころ

笑ひの酒を悲みの

盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ

秋は來ぬ

くさきも紅葉もみぢするものを

たれかは秋に酔はざらめ

智恵あり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはん

## 初戀

まだあげ初めし前髪まへがみの  
林檎りんごのもとに見えしとき  
前にさしたる花櫛はなぐしの  
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて  
林檎をわれにあたへしは  
薄うす紅くれなゐの秋の實みに  
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの  
その髪の毛にかゝるとき  
たのしき戀の盃さかづきを  
君みが情なさけに酌くみしかな

林檎畠の樹この下に  
おのづからなる細道ほそみちは  
誰たが踏みそめしかたみぞと  
問ひたまふこそこひしけれ

## 狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の  
人なきときに夜よるいでて  
秋の葡萄の樹の影に  
ゑのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあらねども  
君は葡萄にあらねども  
人ゑれずこそ忍びいで  
君をぬすめる吾心

相思

髪を洗へば紫の  
小草をぐさのまへに色みえて  
足をあぐれば花鳥はなとりの  
われしたがに随ふ風情ふぜいあり

目にながむれば彩雲あやぐもの  
まきてはひらく繪卷物えまきもの  
手にとる酒は美酒うまざけの  
若き愁うれひをたゝふめり

耳をたつればうたがみ歌神の  
きたりて玉たまの簫ふえを吹き  
口をひらけばうたびとの  
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまににあやしくも  
熱きこゝろのわれなれど  
われをし君のこひしたふ  
その涙にはおよばじな



一得一失

君がこゝろは蟋蟀こほろぎの

風にさそはれ鳴くごとく

朝影きよ清き花草はなぐさに

惜をしき涙をそぐらむ

それかきならず玉琴たまごの

一つの絲のさはりさへ

君がこゝろにかぎりなき

ゑらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき  
君が優しき心から  
かくばかりなる吾わがこひに  
觸れたまはぬぞ恨うらみなる

## 傘のうち

二人ふたりしてさす一張ひとはりの

傘かさに姿をつゝむとも

情なさけの雨あめのふりしきり

かわく間まもなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅花ばいくわの油あぶら黒くろ髪かみの

亂みだれて匂かざふ傘かさのうち

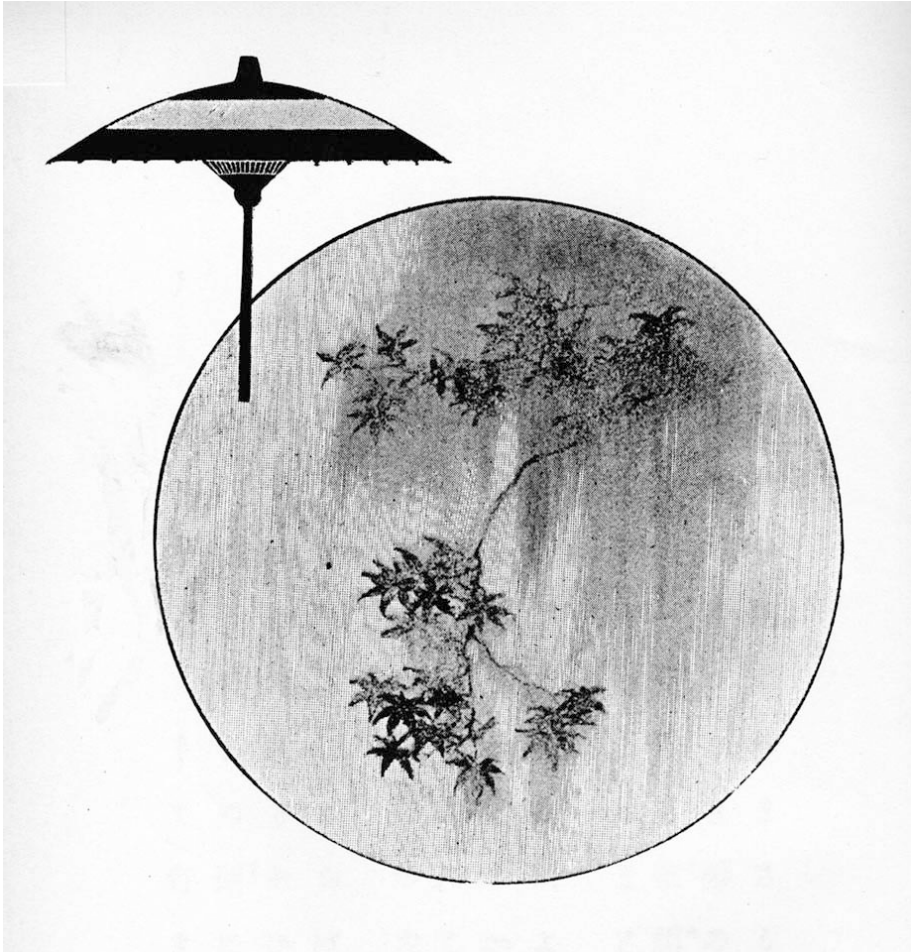
戀こひの一ひと雨あめぬれまさり

ぬれてこひしき夢まの間まや

染めてぞ燃ゆる紅絹うらの  
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ  
えぼし情を捨てよかし  
いづこも戀に戯れて  
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ  
秋の入日の照りそひて  
傘の涙を乾さぬ間に  
手に手をとりにて行きて歸らじ



急にし

わが手に植えし白菊の  
おのづからなる時くれば  
一もと花の暮陰ゆふぐれに  
秋に隠かくれて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥あきどりの  
聲にもれくる一ふしを

知るや君

深くも澄すめる朝潮あさしほの

底にかくる、眞珠しらたまを

知るや君

あやめもゑらぬやみの夜に  
静しづかにうごく星ぐつを

知るや君

まだ弾ひきも見ぬをとめごの  
胸にひそめる琴ねの音を

知るや君

## 秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

えづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲しらくもの

飛びて行くへも見ゆるかな

暮影ゆふかげ高く秋は黄の

桐きりの梢の琴ねの音に

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり





ゆふべ西風吹き落ちて  
あさ秋の葉の窓に入り  
あさ秋風の吹きよせて  
ゆふべの鶉巢に隠る

ふりさけ見れば青山も  
色はもみぢに染めかへて  
霜葉をかへす秋風の  
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の  
まづ秋の葉を吹けるとき  
さびしいかなや秋風の  
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の  
西に東に散るごとく  
吹き漂蕩す秋風に  
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の  
明闇天をゆくごとく  
いたくも吹ける秋風の  
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の  
山の木の葉をはらふとき  
悲しいかなや秋風の

秋の百葉を落すとき

人は利劍を振へども

げにかぞふればかぎりあり

舌は時世をのゝしるも

聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も

息吹まどはす秋風よ

世をかれゝとなすまでは

吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の

壺の中なる秋の日や

落葉と共に飄る  
風の行衛を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり  
秋海棠の花を分け  
空ながむれば行く雲の  
更に秘密を聞くな

## 逃げ水

ゆふぐれゑづかに

ゆめみんとて

よのわづらひより

ゑばしのがる

きみよりほかには

ゑるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ





いのりもつとめも

このつみゆゑ

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらき冥<sup>よ</sup>府<sup>み</sup>までも

かけりゆかん

## 月光

えづかにてらせる

月のひかりの

などか絶間なく

ものおもはする

さやけきそのかげ

こゑはなくとも

みるひとの胸に

忍び入るなり

なさけは説とくとも

なさけをえらぬ

うきよのほかにも



朽くちゆくわがみ

あかさぬおもひと

この月かげと

いづれか聲なき

いづれかなしき

## 強敵

一つの花に蝶と蜘蛛

小蜘蛛は花を守り顔まも

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもノすべぞなき



花は小蜘蛛のためならば  
小蝶の舞まひをいかにせむ  
花は小蝶のためならば  
小蜘蛛の絲をいかにせむ

やがて一つの花散りて  
小蜘蛛はそこに眠れども  
羽翼つばさも軽き小蝶こそ  
いづこともなくうせにけれ

## 別離

人妻をゑたへる男の山に登り

其女の家を望み見てうたへるうた

誰かたれとゞめたん旅たび人の

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらん旅人の

あすは別れと告げましを

清きよき戀とや片かたし貝がひ

われのみものを思ふより

戀はあふれて濁にごるとも

君に涙をかけましを

人妻戀ふる悲しさを

君がなさけに知りもせば

せめてはわれを罪人と

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもゑらぬ憂しや身は

くるしきこひの牢獄より

罪の鞭責をのがれいで

こひて死ななんと思ふなり

誰かは花をたづねざる

誰かはいろに迷はざる

誰かは前にさける見て



花を摘まんと思はざる

戀の花にも戯るゝ

嫉妬の蝶の身ぞつらき

二つの羽もをれゝて

翼の色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいやゝ深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮さかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは  
萩さかばやと思ふかな

待つまも早く秋はきて  
わが蹈む道に萩さけど  
濁りて持てる吾戀は  
清き怨となりけり

## 望郷

寺のがれいでたる僧のうたひしそのうた

いざゝらば

これをこの世のわかれぞと

のがれいでては住みなれし

御寺みでらの藏裏くらの白壁しろかべの

眼にもふたゝび見ゆるかな

いざゝらば

住めば佛のやどりさへ

火炎ほのほの宅いへとなるものを

なぐさめもなき心より

流れて落つる涙かな

いざゝらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさけは熱くもゆる火の

こひしき塵ちりにわれは焼けなむ

松島瑞巖寺に遊び葡萄

栗鼠の木彫を觀て

舟路も遠し瑞巖寺

冬逍遙のこゝろなく

古き扉に身をよせて

飛驒の名匠の浮彫の

葡萄のかげにきて見れば

菩提の寺の冬の日

刀悲しみ鑿愁ふ

ほられて薄き葡萄葉の

影にかくるゝ栗鼠きねづみよ

姿ばかりは隠すとも

かくすよしなしのみ鑿の香かは

うしほにひゞくいそでら磯寺の

かねにこの日の暮るゝとも

夕闇ゆふやみかけてたゞずめば

こひしきやなぞ甚五郎

にはとり  
鶏

花によりそふ鶏の  
夫つまよ妻めどり鳥よ燕かきつばた子花  
いづれあやめとわきがたく  
さも似につかしき風情ふぜいあり

姿やさしき牝めんどり鶏の  
かたちを耻はづるこゝろして  
花に隠かくるゝありさまに  
品しなかはりたる夫つま鳥どりや

雄々しくたけき雄おんどり鶏の  
とさかの色も艶つやにして

黄なる口<sup>くち</sup>背<sup>ばし</sup>脚<sup>あし</sup>蹴<sup>し</sup>爪<sup>づめ</sup>

尾はえだり尾のなが／＼し

問ふても見まし誰<sup>た</sup>がために

よそほひありく夫<sup>つま</sup>鳥<sup>どり</sup>よ

妻<sup>つま</sup>守<sup>も</sup>るためのかざりにと

いひたげなるぞいぢらしき

晝<sup>あ</sup>にこそかけれ花<sup>はな</sup>鳥<sup>どり</sup>の

それにも通ふ一つがひ

霜<sup>しも</sup>に侘<sup>わび</sup>寝<sup>ね</sup>の朝<sup>あ</sup>ぼらけ

雨<sup>あめ</sup>に入<sup>い</sup>日の夕<sup>ゆふ</sup>まぐれ

空<sup>そら</sup>に一つの明星<sup>めいせい</sup>の



闇行く水に動くとき

日を迎へんと鶏の

夜の使を音にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く

空のながめを誰か知る

燃ゆるがごとく紅の

雲のゆくへを誰か知る

闇もこれより隣なる

聲ふりあげて鳴くときは

ひとの長眠のみなめざめ

夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに  
いざ妻つま鳥どりと巢ねを出いでて  
餌えをあさらんと野のに行けば  
あなあやにくのものを見き



見しらぬとり鶏の音も高たかに  
あしたの空に鳴き渡り  
草かき分けて來るはなぞ  
妻戀つまどりふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽はぬれて  
朝日にうつる影見れば  
雄をどり鶏に惜をしき白しろ妙たへの  
雲をあざむくばかりなり

力あるらし聲たけき  
敵かたきのさまを懼おそれてか  
聲い色いろあるさまに羞はぢてかや  
妻めどり鳥は花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて  
背をや高めし夫鳥は  
羽がきも荒く飛び走り  
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛のさきも逆立ちて  
血潮にまじる眼のひかり  
二つの鶏のすがたこそ  
是おそろしき風情なれ

妻鳥は花を馳け出で  
争闘分くるひまもなみ  
たがひに蹴合ふ蹴爪には

火焰ほのほもちるとうたがはる

蹴はねるや左眼さがんの的まとそれて  
羽はねに血ちしほの夫鳥つまどりは  
敵うがの右眼がんをめざしつゝ  
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなるの  
血汐の花も地に染みて  
二つの鶏とりの目もくるひ  
たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり  
争ひ狂ふ四つの羽はね

血潮のりに滑りし夫鳥つまどりの  
あな仆たふれけん聲高し

一聲長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥つまどりの

羽はねは血汐あけの朱そに染み

あたりにさける花紅あかし

あゝあゝ熱き涙かな

あるに甲斐なき妻鳥めどりは

せめて一聲鳴けかしと

屍かばねに嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖おそれと變りきて  
思ひ亂れて音ねをのみぞ  
鳴くや妻鳥めどりの心なく

我を戀ふらし音ねにたてて  
姿も色もなつかしき  
花のかたちと思ひきや  
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶ちようあるを  
鳥に縁えにしのなからめや  
おそろしきかな其の心  
なつかしきかな其の情なさけ



紅あけに染そみたる草見れば  
鳥の命のもろきかな  
火よりも燃ゆる戀見れば  
敵てきのこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の  
照る日も雲に薄らぎて  
花に色なく風吹けば  
野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫つま鳥どりの  
冷えまさりゆく其その姿  
たよりに思ふ一ふしの  
いづれ妻め鳥どりの身の末ぞ

恐怖おそれを抱く母と子が

よりそふごとくかの敵に

なにとはなしに身をよする

妻鳥めどりのこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな

さきの樂しき花ちりて

空色暗く一彩毛ひとはけの

雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ

夫つまか妻鳥めどりか燕子花かきつばた

いづれあやめを踏み分けて

野末を歸る二羽の鶏とり

## 深林の逍遙

力を刻む木匠の

うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻の

鑿の韻もとゞめじな

いろさまゝの春の葉に

青一筆の痕もなく

千枝にわかるゝ赤樟も

おのづからなるすがたのみ

檜は荒し杉直し

五葉は黒し椎の木

枝をまじゆる白樫や

樗は莖をよこたへて

枝と枝ともゆる火の  
なかにやさしき若わか楓かへで

山 精

ひとにしられぬ

たのしみの

ふかきはやしを

たれかする

ひとにしられぬ

はるのひの

かすみのおくを

たれかする

木 精

はなのむらさき  
はのみどり  
うらわかぐさの  
のべのいと

たくみをつくす

おほはた  
大機の

をさ  
梭のはやしに  
きたれかし

山 精

かのもえいづる  
くさをふみ

かのわきいづる  
みづをのみ

かのあたらしき  
はなにゑひ  
はるのおもひの  
なからずや

木 精

ふるきころもを  
ぬぎすてて  
はるのかすみを  
まとへかし

なくうぐひすの

ねにいでて

ふかきはやしに

うたへかし

あゆめば蘭らんの花を蹈み

ゆけば楊梅袖やまもゝに散り

袂たもとにまとふ山葛やまくづの

葛のうら葉をかへしては

女蘿ひかげの蔭のやまいちご

色よき實こそ落ちにけれ

岡やまつゞき隈くま々も

いとなだらかに行き延のびて

ふかきはやしの谷あひに



亂れてにほふふぢばかま  
谷に花さき谷にちり  
人にしられず朽くつるめり  
せまりて暗はざまき峽はざまより  
やゝひらけたる深山みやまぎ木の  
春は木枝こえだのたゝずまひ  
えげりて廣き熊笹の  
葉末をふかくかきわけて  
谷のかなたにきて見れば  
いづくに行くか滝川よ  
聲もさびしや白絲の  
青いはほき巖いはほに流れ落ち  
若ましらき猿ましらのためだに  
音おとをとゞむる時ぞなき

山 精

ゆふぐれかよふ  
たびゞとの  
むねのおもひを  
たれかしる

友にもあらぬ  
やまかほの  
はるのこゝろを  
たれかしる

木 精

夜をなきあかす

かなしみの  
まくらにつたふ  
なみだこそ

ふかきはやし  
たにかげの  
そこにながるゝ  
しづくなれ

山 精

鹿はたほるゝ  
たびごとに  
妻こふこひに  
かへるなり

のやまは枯るゝ  
たびごとに  
ちとせのはるに  
かへるなり

木 精

ふるきおちばを  
やはらかき  
青葉のかげに  
葬れよ

ふゆのゆめぢを  
さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山みやまかぜ

春はしづかに吹きかよふ

林の簫しょうの音ねをきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白妙しろたへの

雲はそでの羽袖はそでの深山木の

千枝ちえだにかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹々きぎをわたりて行く雲の

えぼしと見ればあともなき

高き行衛ゆくへにいぎなはれ

千々にめぐれる巖影いはかげの  
花にも迷ひ石いしに倚より  
流るゝ水の音ねをきけば  
山は危あやふく石いしわかれ  
削けりてなせる青巖あをいはに  
碎くだけて落おつる飛潭たきみづの  
湧わきくる波なみの瀬せを早はやみ  
花はなやかにさす春はるの日の  
光ひかり照ありそふ水みづけふり  
獨ひとりり苔こけむす岩いわを攀よぢ  
ふるふあゆみをふみしめて  
浮うべる雲くもをうかゞへば  
下したにとゞろく飛潭たきみづの  
澄すみむいとまなき岩波いわなみは

落ちていづくに下るらん

山 精

なにをいざよふ  
むらさきの  
ふかきはやしの  
はるがすみ

なにかこひしき  
いはかげを  
ながれていづる  
いづみがは

木 精

かくれてうたふ  
野の山の  
こゑなきこゑを  
きくやきみ

つゝむにあまる  
はなかげの  
水のしらべを  
しるやきみ

山 精

あゝながれつゝ  
こがれつゝ  
うつりゆきつゝ



うごきつゝ

あゝめぐりつゝ

かへりつゝ

うちわらひつゝ

むせびつゝ

木 精

いまひのひかり

はるがすみ

いまはなぐもり

はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

ゆびをりくればいつたびも

かはれる雲をながむるに

白きは黄なりなにをかも

もつ筆にせむいろあや色彩の

いつしか淡く茶を帯びて

雲くれなゐとかはりけり

あゝゆふまぐれわれひとり

たどる林もひらけきて

いと静かなる湖の

岸邊にさける花躑はなつづじ躑

うき雲ゆけばかげ見えて

水に沈める春の日や

それくれなゐのな色染めて

雲むらさき紫となりぬれば

かげさへあかき水鳥の

春のみづうみ岸の草

深き林や花つゝじ

迷ふひとりふかむらさきくれなゐのわがみだに

深ふかむらさきくれなゐ紫の紅の

彩あやにうつろふ夕まぐれ

若菜集  
畢

